

連続市民講座 第3回（平成24年9月29日開催）

人間と経済学

— 経済学の成立とアダム・スミスの人間像 —

講演録

■ 講座概要

アダム・スミス『国富論』は、経済学を成立させた書物として広く知られています。スミスが最初に着手したのは伝統的な倫理学を革新させることでした。新しい倫理学が経済学という新しい学問を必要としていた、とすることができます。近年の再評価にも触れながら、スミスの同感論を中心に経済学成立のプロセスを解説します。

■ 講師プロフィール



経済学部 教授
柳澤 哲哉

1962年群馬県生まれ

● 略歴:

1986.3 東北大学文学部卒

2002.4～2006.7 埼玉大学経済学部助教授

2006.8～現在 埼玉大学経済学部教授

● 専門: 経済学史

● 主な業績:

- ・共著『マルサス人口論の国際的展開』（昭和堂 2010）
- ・共著『経済倫理のフロンティア』（ナカニシヤ出版 2007）
- ・共著『マルサスと同時代人たち』（日本経済評論社 2006）

埼玉大学/読売新聞さいたま支局 共催

後援 ●埼玉県 ●埼玉県教育委員会 ●さいたま市 ●さいたま市教育委員会 ●彩の国さいたま魅力づくり推進協議会

協賛 ●埼玉りそな銀行 ●武蔵野銀行 ●埼玉縣信用金庫 ●さいたまコープ ●埼大通り商店会 ●埼玉県商工会議所連合会

人間と経済学

—経済学の成立とアダム・スミスの人間像—

2012年9月29日

経済学部教授

柳澤 哲哉

今日はアダム・スミスということで難しい話になると思います。多分大多数の皆さんは予習をしてくれていると思います。というのはもちろん冗談として、実際は99%の人が予習をしてくれていないものなので、最初はその99%の人に合わせて説明していきたいと思います。

まずはアダム・スミスの予備知識から。この人はイギリスの人です。スコットランド、つまりイギリスの北の方の人です。そして18世紀後半に活躍した人です。18世紀には議会制がまだ不十分ではありますが、民主主義国家として議会が力を持ってきた時期です。それから資本主義社会の原型が出来上がりつつあった時代でもあります。資本主義社会の原型と難しい言葉を使っていますが、要するに労働者がいてそれを雇う側、雇われる側がいる。そんな社会の原型が出来上がりつつあるというそういう時代のことです。それから産業革命、まあこの言葉はどこかで聞いたことがあるでしょうが、要は工業化、大きな工場なんかが登場する直前くらいに活躍した人ということになります。

主著『国富論』。この本の名前を知っている人は多いかもしれません。経済学の父と書きましたけども、経済学の体系を最初に打ち立てた人と評価される場合が非常に多いです。アダム・スミス以前にも経済学はあるのですが、体系的な書物ということでは、この『国富論』が一番最初のものであると評価されることが多いのです。そしてこの言葉も聞いたことがあるかもしれません。「見えざる手」。神をつけて「神の見えざる手」と訳されることもあります。原語は「invisible hand」です。経済があたかも神様が見えない手で操ってくれているかのように、うまく動いている。そんな意味で使われる言葉、というよりアダム・スミスが使った言葉です。資料には「経済的自由主義」と書いておきましたけども、要するに経済は政府の規制や保護なくしてうまく動いていく。あたかも神様が操ってくれているかのように。そんな意味の言葉として知られております。大体このくらいのことを知っていれば、今日の話は理解できると思います。

アダム・スミスですが、こんな顔をしております。髪型は変な髪型ですが、これはカツラです。アダム・スミスは英国では大変人気のある人で、これは20ポンド紙幣なんですけど、日本円で2400円くらいです。その裏面に印刷されている横顔がアダム・スミスです。2006年にお札が新しくなった時に、デザインとして使われるようになったわけです。それくらいに人気があるということです。『国富論』の冒頭にピンを製造する工場の話が出てきます。お札に印刷されているのはその工場です。このようにアダ

ム・スミスという人は絶えず見直されています。なかなか消えないんですね。250年前に活躍した人なんです、その学説がなかなか死なない。

これは日本で出された『国富論』の翻訳本です。右側にあるのが2007年版、5年経ちましたが、最近でも新しいものが出ています。翻訳した本は15種類くらいあるはずですが、絶えず新しい翻訳の本が出ています。ある意味、読めば読むほど、噛めば噛むほど味が出てくる、そういう本であります。

それでは少しずつ本論の方に入っていきます。ちょっと見にくいかもしれませんが、リスボン大地震の絵です。大西洋を震源地とした大きな地震が1755年に起きました。アダム・スミスが活躍するちょっと前ぐらいです。絵の下半分は海です。津波が起きていて、帆船が何隻も津波に飲み込まれている絵です。沈みかかっているものもあります。上の方に描かれているのがリスボンの都市部で、建物が煙をあげて燃えています。この惨事が1755年に起きたわけです。死者の数は正確にはわからないのですが、大体5万人~6万人くらいと言われています。資料によっては3万とも10万とも言われていますが、大きな惨事があったことは事実です。宗教学や哲学に関心のある方には、よく知られていた地震なんです。思想的な影響が非常に大きかった地震なのです。

フランスの哲学者でヴォルテールという人がいます。その当時、神義論、これは弁神論とも訳されるのですが、神様がどうし

て世の中に悪を作ったのかを論じる神学の問題がありました。地震が起こると罪のない人がたくさん死んでしまうわけですが、なぜそんな残酷ことを神様はなさるんだろうということが問題になったわけです。リスボン地震の前には、例えば神様が病気を作ってしまうのも、悲しい出来事を起こすのも、ちゃんと理由があるんだと、広い目で見れば、全体として見ると、そういう悲しい出来事、悪には意味があるんだと、そう信じるのが受け入れられていました。ヴォルテールはそれに噛みついたわけです。リスボンで何万人という罪なき人が死んでいるのに、その理由がそんな屁理屈でいいのかと彼は考えたわけです。そして彼は当時の宗教のあり方を非難しました。

ヴォルテールに対して、社会契約論で知られるルソーは、リスボン地震は神学的に意味のある地震だったと反論しました。行き過ぎた都市化に対する神の警告という意味があったのだと、こういう主張をしました。カントもまたこの地震について書いています。調べると色々な人が、この地震を論じているのが分かります。その中でアダム・スミスはどうであったのか。そこに話を進めたいと思います。

アダム・スミスも暗に、リスボン地震について触れております。詳しい経歴は後で確認しますが、リスボン地震から四年後に『道徳感情論』を出しています。今日はこの本を中心に進めていきます。

そこでスミスは意外とクールな、少し冷めた見方をしております。資料をご覧ください

い。中国という大帝国が…とありますが、これは単にリスボンを中国に置き換えて書いています。「中国という大帝国が、無数の住人とともに地震によってのみこまれたとしよう。…人は不幸な国民の悲運に対する悲哀を強く表明するだろうし、人生のはかなさについて憂鬱な考察をするだろう。…これらの人道的な感情がひとたびうまく表現されてしまったとき、そういう偶発事件が起きなかったかのように、いつもと変わらぬ気楽さと平静さをもって、自分の仕事や快楽を追求する。もし、明日、自分の小指を失うことになるのであれば、今夜は眠れないだろう。しかし、一億の兄弟の破滅にもかかわらず、彼らを見たことがないであれば、安心していびきをかいて眠るだろう。この巨大な大衆の破滅は、自らのささやかな悲運よりも利害関心を引かない対象だと思われる。」

自分の小指が明日切り落とされるなんてことになればですね、もう大変なことだと。たとえ一億人の見知らぬ人が死のうが、自分の小指というそういうちっぽけなものが失われることの方が、よっぽど大事な問題なんですよと、そういうことを言っているわけです。地震のことについて耳で聞き目で見ても、大変なことだなと感じることはあっても、我が身が被る被害と比べると非常にちっぽけなものにすぎない、という風な考え方を展開するわけです。クールな見方をしている、このことを押さえてくれれば宜しいかと思えます。

それではスミスの経歴について触れていきましょう。イギリスのスコットランドの

生まれです。エジンバラというスコットランドの一番大きな都市の、湾をはさんだ反対側にカーコーディという小さな港町があります。そこに、アダム・スミスは 1723 年に生まれました。そして 1737 年にグラスゴー大学に進んでおります。年齢を数えると 14 歳ですね。14 歳で大学に入ったと聞くと、やはりスミスは天才なんだなと思うかもしれませんが、その当時では特に珍しいわけではなく、ちょっと早いぐらいのもので。そんなに飛び抜けて天才というわけではございません。そしてスミスはエジンバラ大学や母校であるグラスゴー大学で講義を始めるようになります。最終的には母校であるグラスゴー大学の先生になり、そこで道徳哲学の先生になります。そして 1759 年に『道徳感情論』という本を出します。スクリーンに映し出されているものはその初版本です。一橋大学所存の初版本となります。そして今日の話の中心はこの本となります。

スミスは色んなことを研究した人であり、大きく言うと道徳、すなわちモラルを研究しました。今日の狭い意味でのモラルとはちょっと違います。道徳というのは人と人との関係、これが大前提となります。そこから人と人との関係もモラルは対象としていました。それゆえモラル・サイエンスを社会科学と訳すとちょっと意識しすぎですけども、必ずしも間違いとは言えない。そういう幅広い領域を扱っていたのが、この道徳哲学ということになります。資料の年表を見ていただくと 1762 年ごろ、法学講義というのもやっておりました。これは残念ながら、スミス自身は法学の本を著して

おりません。スミス自身が遺した本は『道徳感情論』という本と『国富論』の二つだけとなっています。

ただ法学についても立派な本として遺っていますが、これはスミス自身が書いたわけではありません。当時の学生は非常に真面目だったようで先生の話をして全てノートにとっていたようです。なのでそれを活字にするとそのまま本になったようです。どうですか皆さん？ちゃんとノートをとっていますかね？まあ昔の学生ってのは凄く熱心だったわけです。今の学生たちに「君たちも、もっとノートをとる習慣をつけたまえ。アダム・スミスの学生たちは皆そうだったぞ」って私が言うんですが、そうすると学生の半分が「先生はそう言いますが、それは学生が偉いのではなく、スミスが凄いです。柳沢先生の授業を全部ノートにとったって、本にはなりませんよ」って言うんですね。まあそりゃそうなんですけどね。

アダム・スミスの『道徳感情論』には多少冗談めいたものが入っているんですが、この法学の本には雑談めいたものが少ないようです。もしかしたら学生が雑談をノートにとらなかったのかもしれませんが。ノートを見る限り。私も授業では雑談しないようにしているのですが。学生は雑談を多くする先生を喜ぶ傾向にあります。雑談が多いほど授業の進行が遅れるので、試験範囲が狭まるからです。中には脱線が好きな先生もいまして、どんどん脱線していくそうです。もっとすごい先生もいます。脱線するためには最初に線路が引いてある必要があるのですが、最初から線路がない先生と

いうのもいて、全てアドリブでやってしまわれるのですね。これも脱線のない講義ということになります。

スミスは真面目に授業をやっていました。しかも、とても人気があった。スミスは大学の教員の給与を、聴講者の数に応じて払えば良いと、こういうことも言っています。熱心に授業やって受講する人が増えたなら、それに合わせて給与を貰うべきだとする考え方です。非常に人気のある授業をやっていたわけですね。

それから経歴の方に戻りますけども、フランスに渡ってケネーなどの経済学者と交流した期間もあります。その後 1776 年に『国富論』を出版するわけです。そして 1790 年に没します。

経歴を長いこと喋ってきましたが、二つのポイントだけは押さえておいて下さい。一つは『道徳感情論』という、道徳に関わるような本を最初に書いたということ。次に『国富論』という経済学の本を書いたということ。とりあえずこの二つのことは頭に入れておいて下さい。

この二つの著作はある問題を投げかけてきました。二つの著作はどういう関係にあるのか、あるいはどちらにウエイトをかけて読むべきかといった問題がしばしば論じられてきました。資料のスミスの読まれ方というところで、「アダム・スミス問題」というものを上げておきました。これは第一次大戦前のドイツで提起された問題です。二つの著作の間には矛盾がある。それをど

う解釈すれば良いのか。そういう問題です。

当時のドイツ人は次のように解釈していました。『道徳感情論』は利他心を前提とした書物で、まあ利他心については後ほど説明いたしますが、相手に必要なことをしてあげるのが、利他心と言ってよいでしょう。利他心を元にした人間観で書かれた本が『道徳感情論』である。ところが、『国富論』は、利己心、つまり自分のために生きる、そういう人間観、それを前提にした書物である。このように昔のドイツ人は解釈したわけです。つまり人間観が『道徳感情論』と『国富論』とでは異なる。これが「アダム・スミス問題」として提起されたのです。そして都合がいい事に、両著作の刊行の間に、スミスはフランスに渡っています。そこでケネーたち経済学者たちと交わる。要するに経済学に触れてしまったために、人間とは利己的なものだという風に人間像が変わってしまったんだ、ということで納得したわけです。

実を言いますと、『道徳感情論』が利他心を前提とした書物であるというのは、誤読です。『道徳感情論』の冒頭の1,2ページを読むと、どんな悪人でも他人を慮る気持ちがあるなんて文で始まります。だから誤解しやすいんですが、ともかく利他心を前提としていたというのは誤解です。そして『国富論』は利己心を前提とした書物だと彼らは考えたわけですが、これはその通りでしょう。それから、フランスに渡ったことで、スミスの人間観が変わったという理解ですが、これにも誤解があります。あとで触れますが、実はスミスはフランスに渡

る前から経済学をちゃんと研究しています。つまり本当は、『道徳感情論』と『国富論』とでは人間観には、そう大きな違いはないんだということになります。

これから『道徳感情論』を中心に話を進めて参ります。『道徳感情論』という本は何を書きたい本なのかということをも最初に説明していきます。一つは政府主導の社会理論、これを批判している。政府主導というのはあまり適切な言葉ではないかもしれませんが、例えば社会契約論、まあホッブズという有名な人がいるんですけども、政府があつて社会は初めて成り立つんだ、もし政府がなければ人々は生きるために奪い合い、殺し合いまでしてしまうという考え方です。万人の万人に対する闘争なんていう言葉が有名です。要するに、政府があつて初めて社会が成り立つと言う考え方です。そういう政府主導の社会を批判しようとしたのが『道徳感情論』です。

これがホッブズの書いた本の扉絵なんです。街の後ろに大きな巨人がいます。この大きな巨人が政府ということになります。つまり社会というのは後ろに強力な政府があつて初めて成り立つんだ、という絵なのです。そういう考え方をスミスは批判します。スミスは政府があまり表に出てくるような体制を良しとしませんでした。

資料には重商主義(政府主導の経済運営)の批判と書いておきました。当時は重商主義の時代でした。つまり、政府が色々と産業を保護したり、規制していた時代でした。そうしないと経済はうまく動かないと考え

られていたわけです。スミスは、そうした政府の経済への関与を批判しました。政府がしゃしゃり出てくるような社会を批判したのです。つまり政府がないと社会が成り立ちませんよとか、あるいは政府がないと経済がうまく動きませんよとか、こういう理論を退けようとしたのです。これが資料の方に書いておいた政府主導の社会理論の批判ということなのです。

もう一つの狙いが、利他心による社会形成論の批判です。利他心中心の社会の捉え方とでも言いましょうか、それを批判しようとしたのです。キリスト教なんかには強くありますし、他の宗教にもそういう考え方はあるんですが、相手からして貰いたいことを相手にせよ、これを黄金律なんて言います。それさえ守っていればうまく世の中は動いていきますよ、お互いが相手にして貰いたいことをしなさいよという、相手中心の捉え方ですね。例えば困っている人がいたら助けてあげなさいと、そういう考え方は。例えば、グラスゴー大学でスミスの先生だったハチソンがこの考え方をとっていました。

まとめますと、政府を中心とするような社会の捉え方、あるいは経済の捉え方、これを否定します。それから人間は利他的な存在で、相手のことを思って行動するという理論も否定します。

それでは、積極的に何を言いたかったかと言いますと、人は対等な関係でも社会を作れる。そして、人間は利他的な存在ではない、つまり利己的な存在なんだというこ

とです。要するに、利己的な人間どうしても社会が作れて、ちゃんと動きますよ。こういうことを言おうとしたわけです。ただしある種の前提が置かれていました。

利己的な人間といっても、ホップズのようには食べ物を食べるために相手の物を奪う、あるいは殺してしまうということはないという人間像を想定していました。スミスの想定した人間像には、同感と相互的同感という二つのことが前提されています。両方ともこれから説明します。

スミスの同感とは共感と訳されることもあります。原語は **sympathy** です。これは他人の境遇を知ること、その心情を想像できる能力のようなものです。スミスは例えば、目の前で人が殴られるのを見れば、自分が殴られたかのように思わず身を縮めるだろうと言います。これが一番シンプルな同感です。つまり、相手の境遇が分かれば、相手の心情を想像できるんだということ。それが同感です。こう言っています。「他人が感じることは、直接経験できないから、どのような感受作用を受けているかは、同様の境遇に身を置いたとして感じるはずのものを心に抱くより方法はない。…他人の感情が何であるかについて、我々が考えを抱けるのは、想像力だけによる。」

他人の心の中は見えませんが、それを想像できちゃうんだということです。厳密に言えば、他人の心の中は本当は分からないのです。スミスもそうだと思います。同感というのは言ってしまうと他人の心を理解する能力、あるいは実は理解できたと思

込む能力と言ってもいいかもしれません。本当の他人の心が想像できるとはスミスも考えていませんし、そんなものは実は必要ないんです。実はお互いに想像力の世界の中で、相互に理解し合っているんだ。そういうところに、スミスは話を持っていきたいんです。

だからスミスはこんなことも言ってます。なんと人間は死体にも同感できるのです。「我々は死者にさえも同感する。太陽の光を奪われ、冷たい墓に横たえられ、腐敗や虫の餌食になること、友人や親戚の記憶からさえも忘れられることを悲惨だと考える。」つまり冷たい墓の中で横たわっている人のいわば心の中を理解できると言うのです。死者に心なんてないはずですが、みんなが同じように死者の心を想像し、理解できたと思えば、死ぬのはとっても怖い事なんだということになります。これが同感の捉え方です。今のは少しわかりにくいかもしれませんが、またこの話は後でまたしていきましょう。

ここがかつてのドイツ人の勘違いの原因を説明しておきます。資料に書いてありますが、同感とは同情とイコールではないということです。同情は *compassion* という単語ですが、哀れみとかそんな風に訳せる単語です。貧困に苦しんでいる人の心情を想像すること、これは同感です。例えば職を失って、悲しい顔して歩いてる人、そういう人を見たときに、職を失って大変だなあとか、何故悲しい顔して歩いてるかを理解できます。これが同感です。職を失って可愛そうだから助けてあげよう。これは同情

です。この二つは似ていますが、違うものです。昔のドイツ人は同感を同情と勘違いしていたのです。

さて二つ目の大事な前提が相互的同感 (*mutual Sympathy*) です。スミスの社会理論の鍵と言ってもいいかもしれません。この相互的同感がないと社会の成立なんて説明できないのです。それでは相互的同感の中身を説明しましょう。他人への同感と他人からの同感が相互に成立することを相互的同感と言います。そしてスミスは相互的同感に人間は喜びを感じるというのです。これが重要な点です。私が職を失って悲しそうな顔をしている人を見た時、相手に同感できれば私は喜ぶのです。そして、相手も私が同感してくれたことに喜びを感じるのです。相互的同感の成立に人々は喜びを感じる。だから相互的同感が成立するようにお互いに振舞うようになるとスミスは考えました。

スミスの引用で確認しておきましょう。最初を少し飛ばします。「われわれの同感によって〔相手は〕喜ぶし、同感されないことに傷つく。それと同様に、その人に同感できたときわれわれは喜ぶし、そうでないときに傷つく。」スミスは面白いことも書いています。「同席者の気を紛らわそうとして冗談を言ったのに、誰も笑わなかった時、悔しく思う。反対に、同席者の笑いは、彼にとって高度に快適なものであり、自分の感情に対する同席者の感情の呼応を、最大の喝采とみなす。」分かりますよね。冗談を言ったのに誰も笑わないと傷つくのです。だから、講師が冗談を言ったら笑ってあげ

てください。

同感が成り立つために程度も重要であるとスミスは言っています。適宜性という難しい言葉でそれを説明しています。例えば肉親が亡くなったとしましょう。当然悲しいわけです。泣き崩れたとしても当たり前ですね。当然、肉親が死んで泣いてるんだなと同感できます。ところが、肉親が死んだからといって5年も10年も泣き続けたらどうなるでしょうか。これはさすがに周りの人間も同感してくれなくなります。いくらなんでも泣きすぎじゃないかと。これが最も悲しいことなのです。つまり、肉親が死んだ悲しさよりも、自分が悲しんでいることを周りから同感してもらえないこと。こちらの方が悲しい。だから悲しみを抑えるのだとスミスは言います。だから5年も10年も泣かなくなるというわけです。スミスは痛みについても同じようなことを言っています。何かにぶつかって凄かったとしても、痛い痛いところげ回ってしまうと、周りが同感してくれなくなる。だから、痛いのも我慢してしまう。同感してもらえない方が、痛みよりつらいというわけです。スミスの想定した人間は、社会性を求めていると言ってもよいでしょう。

もう少し話を進めて、中立的観察者の説明に移ります。先ほど相互的同感、つまり相手から同感してもらえる、それから相手のことを同感できる、それが成り立ったら嬉しいな、ということを申し上げました。けれども、その相手はいったい誰なんだという問題が出てきます。親子とか兄弟とかだと相互的同感は成立しやすいでしょう。

親しい友人との間でもそうでしょう。でも見知らぬ他人となると成立しにくくなるでしょう。そして、中立的観察者は見知らぬ他人よりももっと遠く離れた人ということになります。他人の中でも、とって遠くの人です。実は本当は人間ではないのですが、分かりにくい方は見知らぬ他人と同じようなものだと思っただいて結構です。

スミスはこう言っています。「我々は普通の知人からは、友人よりも少ない同感を期待する。・・・見知らぬ人々の一集団からは、我々はさらに少ない同感を期待する。そこでわれわれは、彼らの前ではもっと多くの平静さを装うのであり、われわれの情念を、ある[見知らぬ]集団がついてくることを期待できそうな程度にまで下げようと努力する。」つまり喜びとか悲しみってというのは、他人であればなかなか同感してくれない。だから、喜びや悲しみの程度を抑えないと、見知らぬ他人は同感してくれない。相互的同感が成立するためには、行き過ぎた感情や利己的振る舞いを抑制する必要があるというわけです。

よくこんな例を授業では出して説明します。例えば自分の子供が学校の試験で100点を取ってくれば、親は嬉しいわけです。「お前凄いなあ、流石俺の子だ」といってバンザイをして喜ぶ親がいるかもしれない。家庭の中だからそれでよろしいんですね。これをそのへんの道端でやりますと、周りが同感して貰えないんですね。あのおっさん何をやっとなるんだとなるわけです。他人の前では、自分の感情を段々と抑えていくわけです。そうすることによって人々は

社会の中に受け入れられていく存在になるわけです。スミスは感情の抑制や行動の抑制を互いにやり合うようになると考えたのです。

見知らぬ他人から同感してもらえるように振る舞い、やがては他人の目を内面化するようになっていく。こういう議論をスミスは展開したわけですから、少しだけ難しい話をしましょう。難しければ、聞き流してもらって結構です。哲学的な言い方をすれば、共同主観の成立をスミスが論じているといってもいいのです。昔はドイツの哲学が深淵な哲学であるのに対して、イギリスの哲学は浅薄な哲学だなんて考えてる人たちが結構いました。私もそう考えていました。英国経験論というのですが、見たものを聞いたものを単にそのまま受け入れるというのが、イギリスの単純な哲学だと思っていました。ところがそうではないのです。スミスが言っているのは、個人の意識の社会化、あるいは社会的意識の形成なのです。想像力を介して、お互いの意識を共同の意識のようなものとしていく。こういった考え方をスミスは持っていたこととなります。議論の運び方は違いますが、フッサールなんていうドイツの哲学者なんかと似たようなことを言っていると見ることもできます。難しい話はここまでにしましょう。

話を進めていきましょう。お互いに、理解し合えるような存在に成ったとして、それでは実際にどう振る舞うのでしょうか？あるいは、どういう振る舞いをすると同感してもらえなくなるのでしょうか？スミスは比喩を使って説明しています。フェア・

プレイの比喩という、有名な比喩です。中立的な観察者から同感を得るように行おうとするならば、彼は行き過ぎた自愛心……これは利己心でもいいです、自愛心というのは self love という単語があるんですけども、まあ利己心です。これを抑えなければならぬ。それを、他の人々がついていけるようなものにまで引き下げる必要がある。その限りでは観察者たちは、自分の幸福を他のどんな人の幸福よりも切望し、それをいっそう真剣に追求するのを許す程度には寛大であろう。……富や名誉や地位をめざす競争……この富や名誉や地位を目指す競争に少し印でもつけといてください。その競争で、すべての競争者を追い抜くために、できる限り力走してよいし、あらゆる神経や筋肉を緊張させてよい。しかし、もし誰かを押し倒したり、投げ倒せば、観察者たちの寛大は完全に終了する。それはフェア・プレイの侵犯であって、観察者が許し得ないことである。

お互いに利己的であっても同感は成立すると言っているのです。だから富や名誉や地位を追う競争では目一杯、富を増やそうとして良いんですよという風にスミスは言っている。一生懸命頑張ってお金儲けしていいんですよと言っている。ただし、相手を投げ倒したりするとルール違反になる。そんなことをすると、他人から同感してもらえなくなります。こういう比喩なんです。

まあこれは比喩ですが、フェア・プレイを具体的に言うとどういう事になるのでしょうか。それが次の話です。フェア・プレイで守るべきルールですが、「神聖な正義の

諸法」まあ「神聖な正義の法律」と言っても良いかもしれません。スミスは次のようなものをあげています。「われわれがその侵犯に対して」・・・まあそのルールを犯した相手に対してですね、「処罰をもっとも声高に主張するのは、隣人の生命身体を守る法律、次に所有権を守る法律、最後に他の人々に約束によって彼に帰属するものを守る法律である。」要するに、生命身体の自由、それから所有権、それから契約、これを守らないと同感してもらえなくなります。逆に言うと、それさえ守っていれば、人々は同感してくれる。この三つのルール、これさえ守っていれば、それで人々は社会的な存在として認めてくれる、要はお互いに今言った三つを守っていれば、それでいいんですよとスミスは言っているわけです。

もし、困っている人がいたらそれを助けなければいけないのか？こういう問題が出てきます。それがスミスの中でどういう風に扱われているのかというと。実は「助ける必要はない」なんですね。スミスはこう言っています。「社会に生きる人々は相互の援助を必要としている。・・・しかし、相互の愛情と愛着がないにしても、その社会は幸福さと快適さは劣るけれども、必然的に解体することはないだろう。・・・互いが責務感を感じないとしても、互いに感謝の気持ちで結合していなくとも、世話を損得勘定で交換することで維持される。」「損得勘定」で交換すれば、社会は維持されると言っていますが、平たく言えばですね、物を売ったり買ったり、まあサービスでもいいんですけども、売ったり買ったりするそれだけでいいんだ、と言っているんです。

他人のことを慮る利他心は、それは飾り物でしかないとしているんです。利他心はあった方がよいにしても、スミスに言わせればそれは社会の成立にとっては飾り物でしかない。逆の言い方をすれば、利己的な振る舞いこそが実は社会を成立させる根本であると、スミスは言っているのです。

非常に小さな部落などでは、お互い利他心に溢れるような共同体、小さな集落などが出来るかもしれません。相手のことを考えて振舞っている。例えば魚を獲ってくる、木の実を採ってくる、それを皆で分け合う。それでもやっていけるでしょう。しかし、社会が大きくなると、それでは成り立たないのです。利己心に基づいて、やっぱり損得勘定で交換をする、売ったり買ったりする。そうでないと社会が成り立ちませんよということをスミスは言っているのです。

しかもスミスは、こんなことさえ言っています。消極的正義と呼ばれています。「単なる正義はたいていの場合に消極的な正義にすぎず、隣人に害を与えるのを妨げるだけである。」隣人に害を与えるというのはさっきの生命身体の自由、所有権とかそういう類ですね、それさえ守ればそれでもう正義だとしているのです。「・・・われわれは静座し、何もしないでいることによって、正義の諸規則の全てを満たしていることがあるだろう。」これは古い考え方かと言いますと、とんでもない、利己的な考え方になります。困っている人がいたらどうするのか？例えばキリスト教の世界ならば、施しを与えるのがキリスト信者の義務であると

いう風に昔は考えていたわけです。そういう考えをスミスは捨てたわけです。

消極的正義というのは、困っている人がいたらどうするんだという問題に対して、何もしなくていいんですよと答えているわけです。ただ座っていれば、いいですよ…と、こう言われると「えっ？」となるわけです。18世紀の社会では貧困の問題というのは大きな問題として目の前にありました。この問題への対応を、『道徳感情論』という、道徳の部分では未解決のまま残したといってもよいでしょう。そこで『国富論』という本を書いたという風に見ることができます。私はそう思っています。

『国富論』というのは経済学の本でありまして、双方の価値がどういう風に決まるかとか、分配がどう決まるかとか、地代がどう決まるかとか、あとは経済成長を遂げるにはどうしたらいいのかなどについてを書いてあります。書き方は古いですけども、中身は現代の経済学とそんなに変わらない内容となっています。なぜそれを書いたかと言えば、倫理学の続きということになるわけです。スミスの『道徳感情論』というのは新しい倫理学、あるいは新しい社会理論を展開したものです。そしてそこで解決しきれなかったものを解決するために『国富論』が書かれたと言っても良いかもしれません。

『国富論』によって未解決の倫理の問題を解決したというのはどういうことなのか？簡単に言うと、ひとりひとりが困っている人を助ける、なんていうことをしなく

ても、貧困は解消されていく。そういう経済システムが出来上がるんだと、平たく言えばそういう話なんです。

ピン製造工場の話から『国富論』は始まります。人々が作業を分業していくことで生産力が高まる、つまり物を作る能力が非常に上がっていく。物がどんどんと作られれば、それが隅々にまで行き渡っていく。そうすれば貧困は解消するんだ。大雑把に言うと、ひとりひとりが貧困の問題を解決するように振舞わなくても経済システムが解消させてしまう。こういうことを言ったわけです。最初の方で経済的自由主義をスミスは追求したと話しましたが、あたかも「神の見えざる手」に導かれたかのように、自由な経済活動を通じて、豊かな社会を実現していくという、そういう話なのです。

『国富論』はそういう意味で、新しい社会理論、新しい倫理学を完結させるために必要であったと言えるでしょう。「スミスは経済学者である前に、道徳哲学者であった」とよく言われます。「経済学は実は道徳から始まったんだ」と。まさにこれは正しい。今日の経済学では所有権は自明な出発点として扱われますが、スミスはそういう根源的のところから考えています。利己的な行動についてもそうです。通常のエconomicの大前提から問い直しているわけです。今日では、このへんが高く評価されています。

確かに道徳から経済学をスミスは生み出しました。しかし、本当に道徳から経済学は一方的な発展の結果として生まれたのでしょうか？これを仮に経済学の本で書い

てみたら、富や名誉を求めて皆精一杯、頑張った結果、貧しい人がどんどん増えてしまう。そういう結論がでてしまったなら、スミスはどうしたんだろうか？ こういう疑問が出てくるわけです。確かに一応、道德の本を書き終えて、その次に経済学の本を書きました。しかし、本当にそんな単純な話だったのか？

道德から経済学へ一方向的に話が進んでいったのかと、別の言い方をすれば、経済学優位か？倫理学優位か？と言ってもいいかもしれません。つまり経済学の展望が全くないままで『道德感情論』という本を書いたのかと言うと、実はそうではないのです。『道德感情論』には、次のような文章があります。「富裕な人たちは、生まれつきの利己心にかかわらず、全ての大量の正貨を貧乏な人たちと分け合う、見えざる手に導かれて意図することなく、それを知ることなしに社会の利益を押し進める。」富裕な人が自分の利益を追求していても、つまり、貧乏な人たちを豊かにしようなんて全然考えていなくとも、貧しい人が豊かになっていく。「見えざる手」に導かれて、意図することなく、そうになっていく。このように『道德感情論』で書いています。

何が言いたいかと言いますと、実は『道德感情論』を書いた段階でスミスは経済学のいわば結論、これは『国富論』の結論と言ってもいいですが、それを書いているわけです。スミスは経済学の結論を展望していたわけです。もちろん『国富論』で展開している詳しい経済学なんていうのは全然『道德感情論』では出てきません。しかし、

経済学をある程度、展望できていたのです。ちなみに「見えざる手」というのは、非常に有名な言葉であると最初に触れておきました。有名な言葉ですが、『道德感情論』の中ではこの箇所だけで、実は『国富論』のでも一箇所しか出てきません。

ドイツで提起されたアダム・スミス問題に立ち返るならば、相当そそっかしい問題だったと言えるでしょう。『道德感情論』と『国富論』は、全く別の人間像で書かれたものではありません。ちゃんと読めば、『国富論』の結論が『道德感情論』の中に書かれていたのに気づいたはずです。『道德感情論』というのは経済学の世界を、ぼんやりとはありますが、遠くに見た上で書かれたのです。もし、それが展望できなかつたら、スミスは『道德感情論』の執筆を断念したかもしれません。

アダム・スミスは晩年まで、『道德感情論』の改訂を続けていきます。実は『道德感情論』という本は、ちょっとわかりにくい本です。『国富論』はわかり易い解説書がいっぱい出てます。だから、あらすじはそれ読めばわかっちゃいます。しかし『道德感情論』はあらすじがちゃんとわかるような解説書というのは多分ないと思います。読んでみると、部分部分はわかるんですが、全体が分かりにくいのです。スミスもそう考えていた可能性があります。だから、『道德感情論』はあちこち手直ししながら、改訂を重ねていったのかもしれない。

スミスは最晩年にこんなことを書き加えています。「幸福は平静と享受 (enjoyment)

の内にいる」。エピルス王というギリシャの王様がいました。領土を占領していった王様です。この人が年をとってから友人にこう言ったとスミスは書いています。これから王様は何を目指すんですか、と聞かれたエピルス王はこう答えたそうです。「友達と一緒に楽しく酒が飲みたいよ」と。普通の生活を営めるといふ幸福は、代え難いものであるということです。つまり、財産を滅茶苦茶でかく増やしたいとか、物凄い豪勢な生活をするとか、そういうのではなく、普通の生活を送るといふことこそが幸福なのだ。スミスはこう書き加えたわけです。

晩年の改定を読むと、スミスは若い時に言っていたことと違うことを言い出したんじゃないかと思われうるかもしれません。地位や名誉や富を追う競争では目一杯頑張ればいいんだと言っていたのに、晩年になると、ささやかな生活こそが幸福だと言い出したすわけですから。もしかしたら、スミスも多少はそう思っていたかもしれません。晩年になってこんなものをドタバタと付け加えているわけですから。でも、若い時に書いた『道徳感情論』から、全く逸脱したことを晩年に書いたのかと言えば、そうではないと私は考えます。

相互的同感を成立させるために、感情や振る舞いを抑制すると言っていましたね。自己規制と言ってもいいでしょう。贅沢な生活を求めないというのは、この自己規制の延長上の話かもしれません。それでは、もう少し晩年の改訂を付け加えていきましょう。「虚栄というつまらぬ快樂を除けば、高い地位の人の快樂と同じものを、低い地位

の人でさえ見出すことができる。」もちろん、貧困の問題は未解決のままでもいいとは考えていないでしょう。貧困の問題はやはり解決しなければならないと考えていたはずで、不等式で優先順位を書くなれば、「富や名誉や地位を目指す競争」<「普通の幸福を営める幸福」と位置づけていたように思います。

確かに、「富や名誉や地位を目指す競争」においては、精一杯力を出していいとスミスは言っていました。しかし、「富や名誉や地位を目指す競争」を人生の究極の目的であると語っていたわけではありません。富や名誉や地位を目指す競争の世界は、言い換えれば市場経済と言っても良いでしょう。しかし、そこでの経済活動が人間の全てではないわけです。当たり前のことですが。もちろん、スミスにとって経済的自由主義を実現することは重要な目標でした。そして、『道徳感情論』と『国富論』を繋げて理解しようとする時、どうしてもそこに目が行ってしまいます。しかし、『道徳感情論』は経済活動以外についてもいろいろと書いています。

単純なフェア・プレーの比喩が通用しない領域をスミスは考えていたはずで、少なくとも、われわれはそういったものを考えていけるはずで、スミスが詳しく論じたわけではありませが、同感論を用いて市場経済以外の領域も考えて行けると思うのです。例えば、新しいコミュニティ、これは私ではなくてスミス研究の先達の受け売りですが、古い封建的な共同体ではなくて、意識的に参加していくような新しいコミュ

ニティの問題。金儲けの関係、損得勘定でない人と人との繋がりといった領域について、スミスの同感論が示唆するところは多いはず。今日では NGO や NPO のウェイトも高まっていますが、これも同感論である程度、基礎は説明できるかもしれません。

コンピュータに詳しい人は知ってると思うんですが、gnu という運動があります。普通、コンピュータ・ソフトには著作権がありまして copy right というんですが、これをひっくり返して copy left って言うんですね。右に対して左って何かそれっぽい匂いがしますが、copy left って何かというと、著作権は放棄しません、だけれどもそれを全員が使う権利を認めます。私が作ったソフト、これはタダでどうぞ皆さんお使いください、二次配布自由です、どんどん配布していただいて構いません。ただし商業利用はいけません、つまり企業もしくは個人がそのフリーのソフトを組み込んで商品を作り、それを有料で販売することは許しませんということです。そういう面白いものが 20 年くらい前からあるんですね。そういったソフトは幅広く使われているわけで、決してちっぽけな存在ではなく、実際のわれわれの IT に溢れた生活に重要な役割を果たしていると言えます。こういうコミュニティを支えているものも、同感論で説明できると思います。

経済学に近いところで、同感論の可能性を上げておきましょう。取引費用論への応用と資料に書いておきましたが、取引費用というのは、売り買いの際にかかる情報収

集とか契約のコストのことです。色々なものを売ったり買ったりするときに、細かな契約書を一々作成しません。どこかでラーメン屋に行ってそこでラーメンを食べる時に、お店を相手に契約書を結ぶことなんてないですよ。味噌ラーメン一杯と注文して、出てきたのを食べて金払って帰る、そんな暗黙の了解で済んでいることが山ほどあるわけですね。注文を受けて、ラーメンが出てくるまでに三時間もかかりましたなんてことは許されないはず。とてつもなくしょっぱいラーメンとかね、こんな食えるかってつ返すこともあるわけですよ。実はそういう暗黙のルールというものを前提にしてわれわれはものを売ったり買ったりしているわけです。あるいは人を雇用する時のルールにも、守るべき暗黙のルールが山ほどあるんですね。何故、細かいことを記載した契約書を取り交わさないのかと言えば、そんなことをしたら凄くコストになるわけです。守るべきルールが何かお互いにわかっているならば一々確認する必要がないからです。これは相互的同感の成立で考えることができます。細かい話のように思われるかもしれませんが、実はこの取引費用をどうすれば最小になるのかというのは、実は今ホットな話題でもあるのです。

最近では行動経済学なんて実験をやる経済学があるんですが、同感論を、実験を使って説明しようと頑張っているっていうグループもあるそうです。脳神経なんかの専門家と共同で色々な実験やっている経済学者がアメリカなどを中心にいます。スミスの言う同感や相互的同感の喜びというのは

脳のレベルで実証できるそうです。どういうことをやっているのか僕には分かりませんが、実はスミスが与えてくれたアイデアというのは、色々な方向でまだまだ使える、そういう可能性を持っているといえます。

同感論や相互的同感論を強調して参りました。スミスの考えで何でも説明できるということではありません。しかし、人と人とが何か関係しているような領域は、恐らく経済学でないものの方が多いと思っておりますが、スミスのアイデアがヒントを与えてくれるように私は思っています。

今日の話は少し難しいところが多かったかもしれませんが、スミスが『道徳感情論』という道徳から出発して『国富論』を書いたこと。しかし、その道徳の話の中で、すでに『国富論』の世界を遠くに眺めていたこと。そんなところをご理解いただければ、幸いで御座います。これで終わりと致します。